

令和4年12月9日（金曜日）

全国高校文芸コンクール

本県4部門で優秀賞

第37回全国高校文芸コンクール（全国高校文化連盟など主催）で、県勢は小説7人、随筆1人、詩5人、短歌4人、俳句6人、文芸部誌5団体の計23人5団体が入賞した。うち最優秀賞に次ぐ優秀賞には小説、短歌、俳句、文芸部誌の4部門で県内6校の7人3団体が選ばれた。表彰式は17日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）で行われる。7部門に全国の326校から2万7823点の応募があり、都道府県選考などを通過した8388点が審査された。文芸活動に熱を注ぎ努力の成果を見せた、受賞生徒と作品を紹介する。

小説部門 優秀賞
菊池 結衣さん
(盛岡一三年)



「悠久メモリー」は、女子高生が介護施設にいる認知症のおばあさんとの交流を通して、趣味の写真を撮

リアルな描写を追求

る意味を見いだし、成長していく姿を描いた。1枚の写真を見つけたに再会したおばあさんは、認知症が進行し主人公を忘れていた。写真を撮ることで誰かの記憶を紡いでいこうと決意し、カメラマンを志す。看護師の母親の助言をもとに介護現場のリアルな描写を追求した。主人公を自らに憑依させ、夏の暑さに対する身体感覚や心の動きを高校生らしく素直に表現した。「主人公を通して自分も多様な体験ができる」と創作の魅力を語る。「つらい事実で終わらせず、残された側の視点で、悲しみを乗り越えた先の成長を前向きに描いた」と振り返り、小学生から続ける執筆活動に「自身の体験を基にするのではなく、一から人物を作り上げるのが楽しい」と笑顔が輝く。

(岩手日報)

小説部門 優秀賞

佐々木 椿さん
(盛岡一二年)



「キャンパスのシロツメクサ」は、進路に悩む女子高生が見ず知らずの男「島田」との出会いをきっかけ

夢追う姿に自身重ね

に過去と向き合い、好きな美術の道に進もうと決めるまでの成長を描く。中学時代の教師に作品をけなされたトラウマで、得意だった絵から逃げてきた主人公。高校最後のコンクールに向けて島田と「リハビリ」を重ねながら、再び絵と向き合っていく。小説を書くのは初めてで「自分以上に熱を燃やしていた」小説好きの兄からの熱心なアドバイスで締め切り間際まで修正した。「面識のないおじさんが言うせりふだからこそ、刺さるものがあると思う」と主人公に思いを重ねる。自身も絵が好きだが、続けるかどうかは何度も心が揺れた。「やりたいことを曲げずに夢に向かい、諦めなければ努力は実る」。作品に込めた思いを胸に、フライダルデザインの道を志す。

この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています。